09 計画演習 II
1. 神戸ウォーターフロント　マスタープラン課題

開講年次：学部４回生前期

[担当教員（前半）]
課題説明：近藤民代（准教授） 栗山尚子（准教授）
　　指導：所属研究室教員

■課題趣旨
神戸のウォーターフロントは緑豊かな六甲山系と大阪湾の青い海に挟まれた日本を代表する港町である。開港以来、もの、人、文化のゲートウェイとしての役割を果たし、神戸独自の都市的な文化を醸成してきた。

しかし、近年港湾部の工業や物流の衰退に伴いウォーターフロントの未来へのビジョンが問われている。ウォーターフロントの再生は世界的な課題であり、アメリカ・シアトル市においても老朽化の進んだ高架高速道路の地下化及び港湾防波堤・インフラの更新、そしてダウンタウンと水辺をつなげて国際的な都市の競争力を高めるための取り組みが今まさに始まっている。

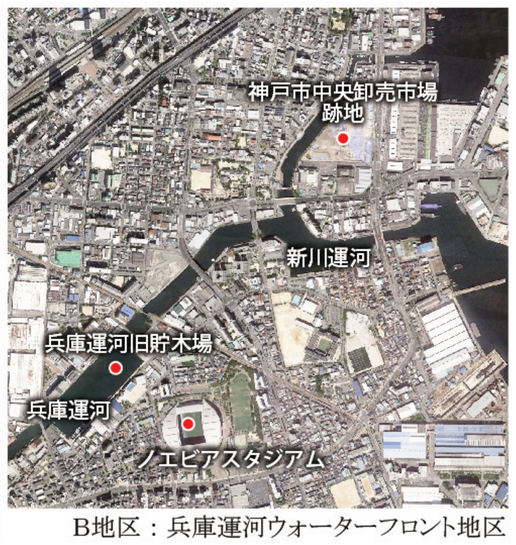
今回の課題「神戸ウォーターフロント」は2つの面的な敷地を対象に、ウォーターフロントのビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点から考えることとする。既存の都心エリアの魅力や既存の公共空間や公園などランドスケープ資源を活用しつつ、道路や港湾など土木施設のリノベーション、そして海と都市をつなげて世界的な神戸ウォーターフロントを構想するための計画を提案してほしい。

■敷地（別紙地図）
計画地区は、別紙地図に示す神戸市のウォーターフロント及びその周辺地域を含む A、B のうちいずれか一つを選択する。地区特性、土地利用、ウォーターフロントへのアクセス等を考慮すること。

■A 地区：都心ウォーターフロント地区
A1：みなとのもり公園 2 期、第 1 ～第 3 突堤、
　　波止場町 1 丁目、東遊園地～神戸市役所付近
A2：メリケンパーク、ポートタワー周辺
拠点オープンスペース：東遊園地（A1）、メリケン広場（A2）など
■B 地区：兵庫運河ウォーターフロント地区
B1：新川運河
B2：兵庫運河
拠点オープンスペース：神戸市卸売市場跡地（B1）、兵庫運河旧貯木場周辺（浜山キャナルプロムナード・浜山小学校・ものづくり復興工場付近）（B2）など



A 地区：都心ウォーターフロント地区

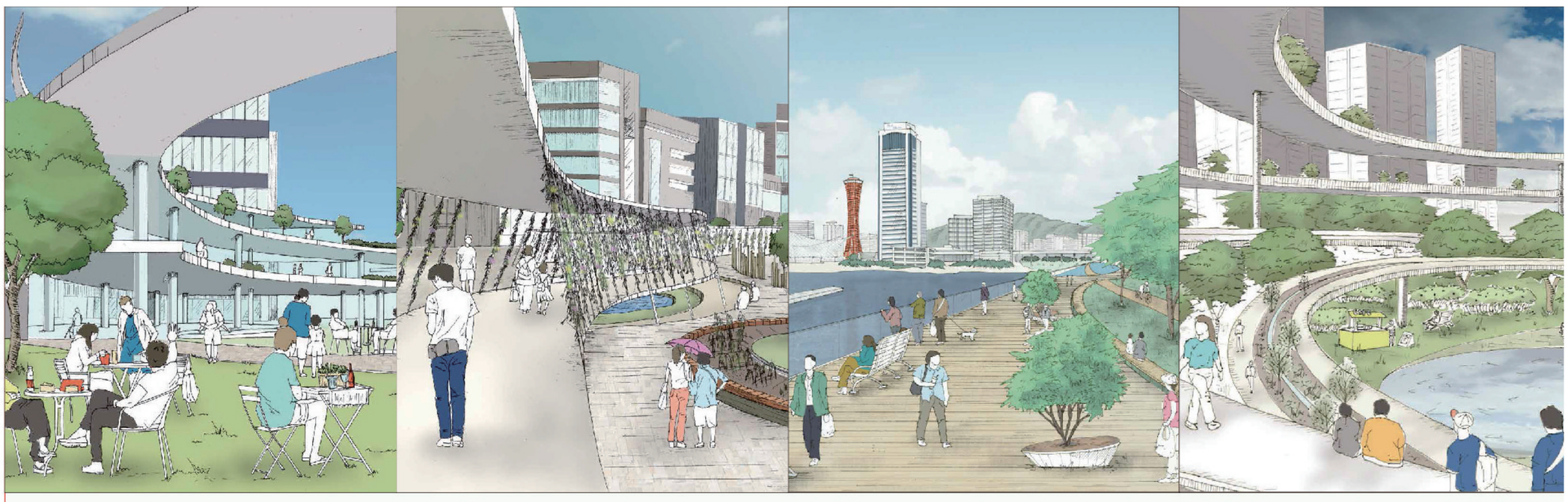


B地区：兵庫運河ウォーターフロント地区

FOODSCAPE

植田実香　大西琴子　宅野蒼生　中倉俊　北條太一（遠藤研究室）

多様な文化、環境条件を有する神戸は、その数だけ豊富な「食」を育んできた。特性の異なる食をつなぐ 4 つの結節点と高架のハイライン化を計画の軸とし、回遊エリアを形成。神戸ウォーターフロントに新たな「食の風景」を与える。



KOBE WATERFRONT
FOODSCAPE



計画演習 II
09 2．神戸ウォーターフロント　ランドスケープ課題

開講年次：学部４回生前期

［担当教員（後半）］
ランドスケープ設計課題
吉武宗平（鳳コンサルタント）
岩瀬諒子（岩瀬諒子設計事務所）
向山雅之（竹中工務店）

［Teaching Assistant］
斎藤愛（A65） 野田杏菜（A66）
ランドスケープ計画課題
北後明彦（教授） 近藤民代（准教授） 栗山尚子（助教）
山口秀文（助教）

課題：パブリックオープンスペースのデザインを核にした Livable City 神戸の創成

■課題趣旨・目標

前半の都市デザイン課題では都心部のウォーターフロント地区と兵庫運河ウォーターフロント地区を対象に都市地域再生のマスタープランを作成した。 後半のランドスケープ設計課題は未来の地域の拠点として都市の活力を牽引するパブリックオープンスペースのデザインである。 都心・兵庫運河ウォーターフロントへ広がる面上の敷地に都市への戦略を保持しつつ微細な空間や環境を併せ持つ魅力的な拠点オープンスペースを構想してほしい。 新しい都市のライフスタイルや多様なプログラムを許容する空間、 様々なスピードや流れに対応するデザイン、 高い回遊性を持ち、 新しい都市のライフスタイルを創造する場所、 都市に変化を呼び込むランドスケープデザインに挑戦する。

■課題の進め方・ポイント

・前半課題のマスタープランの中で拠点となるオープンスペース（具体的には広場、公園、道路、歩行者空間、土木施設、埠頭、工業跡地、公開空地など）を選定する。 グループの中で選択した拠点オープンスペースを組み合わせることで都市にどのような活力をもたらし、 変化を起こすのか目標を設定する。
・都心部とウォーターフロントの関係性を再考し、 都市における新しい水辺の意味を考える。
・拠点とする対象敷地の周辺 1 街区程度（拠点エリア）も拡大した対象敷地として捉えデザインコンセプトを構想する。
・敷地における環境条件などの直接的なコンテクストと、経済・文化・社会・生態などより広い概念のコンテクストの双方を理解し、 設計を進める。
・対象敷地（拠点）と周辺エリア（拠点エリア）においてどのようなランドスケープ操作が都市活性化のツボとなるのかを敷地周辺の操作も考えつつ設計を進める。
・面的な敷地における地形操作、 植栽・水・小構造物等ランドスケープから発想する敷地デザインを学ぶ
・プログラムやアクティビティを構想し、 都市内の回遊性を高めるだけでなく多様な利用を誘発するデザインの仕組みをつくる。
・都市スケール～身体スケールにおけるデザイン操作を行い、 スケールの伸縮と操作の有効性を立面・断面・詳細などの検討を通して空間の設計へとつなげる。
・個別の設計を進めながら課題の大きな目標に対してグループ・メンバーの個別の敷地デザインがどのように全体に作用しているか、 確認しながら設計を進めること。

■設計キーワード

都市広場、 立体公園、 水のランドスケープ、 パブリックとプライベート、回遊性、多様性、ピア・スケープ、テラス、屋上、半屋外、中間領域、スポーツ、身体性、速度、アクティビティ、生活、劇場、多機能、変化、時間とプロセス、 物語性、 水平性と垂直性、 都市の庭、 歩行者空間、自転車、スケートボード、ウォーターフロント、海上公園、眺望、階段、ランドフォーム、複層的、人工地盤、気候変動、雨水、防災拠点、ファニチャー、 ポケットパーク、 ウォール、 植物都市、 パブリック、 インダストリアル・ランドスケープ、 テクスチャー、 記憶、 リノベーション、 レベル差、スロープ、ショッピング、健康、子供の遊び場、エコロジー、食、眺望、 ショッピング、 森、 自然と人工物、 夜のランドスケープ、 光

■講評会の様子

［ゲスト講評者］
春元崇志（神戸市企画調整局地域ビジョン部未来都市推進課）





■学外展覧会への出展

・京都ランドスケープデザイン展 2018（京都造形芸術大学）

大西琴子、 中倉俊、 山田千彬、 横田慎一郎

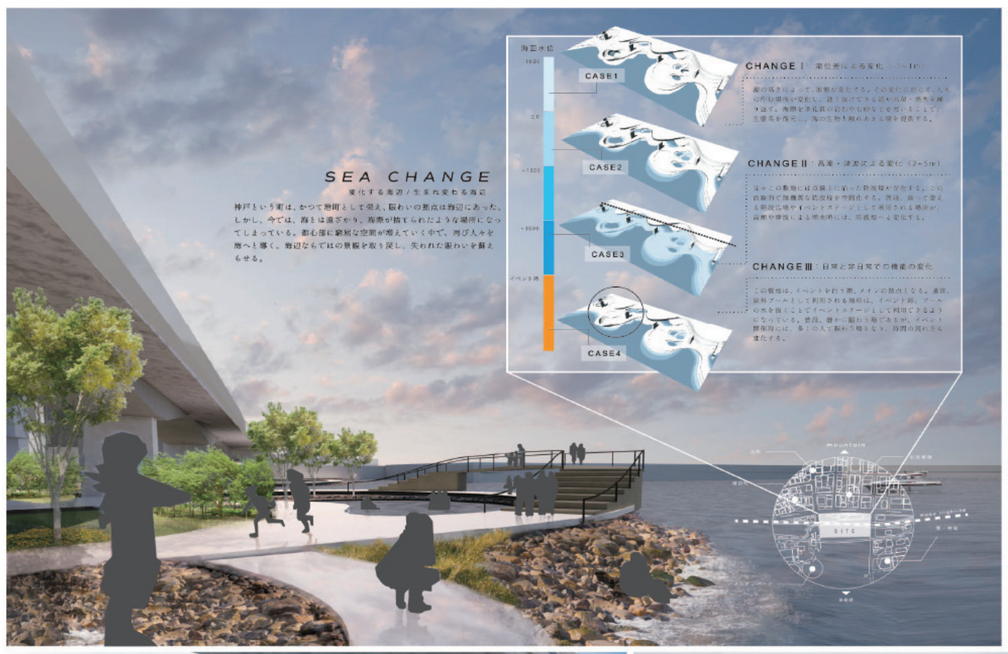




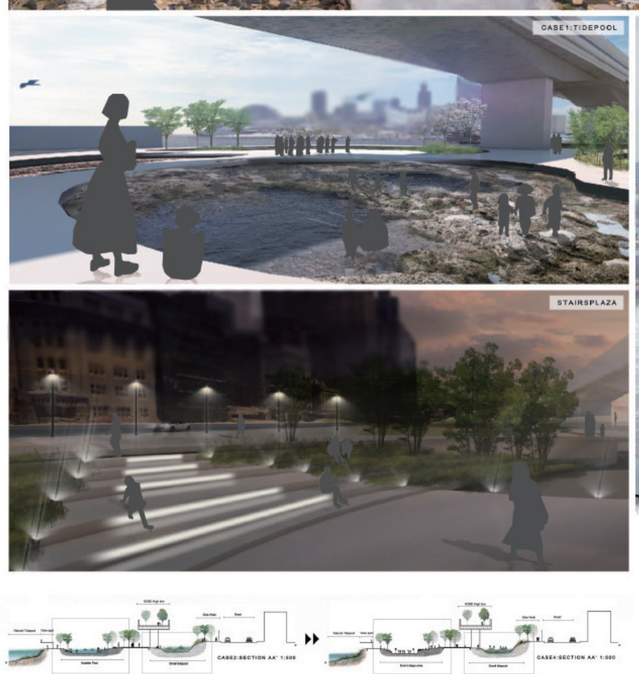
SEA CHANGE

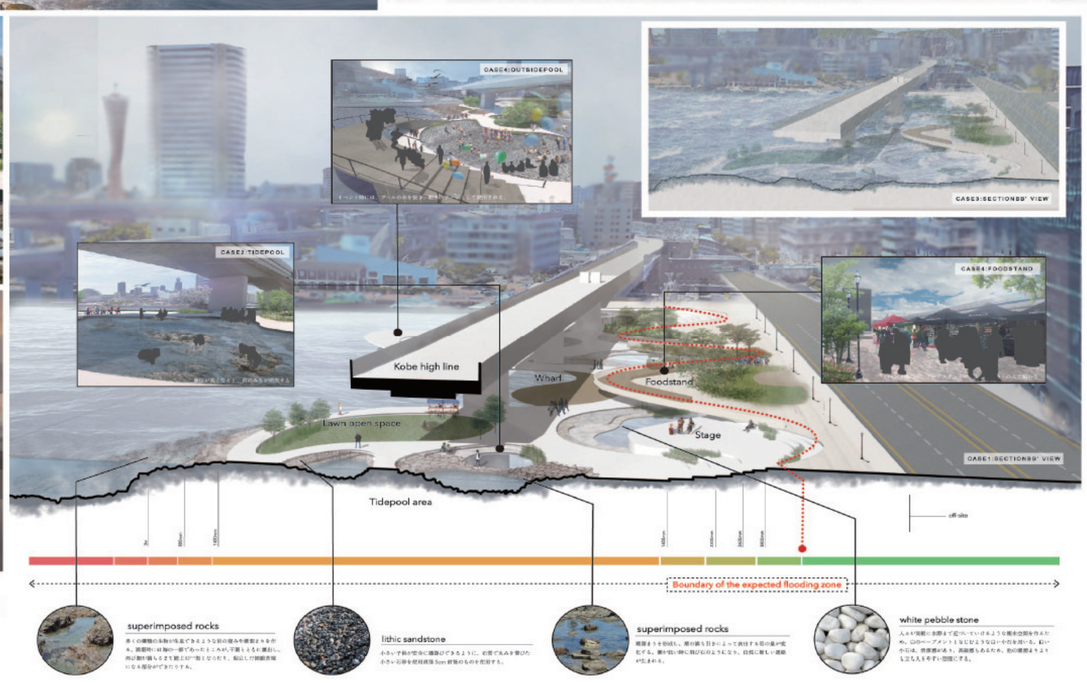
植田実香 (遠藤研究室)

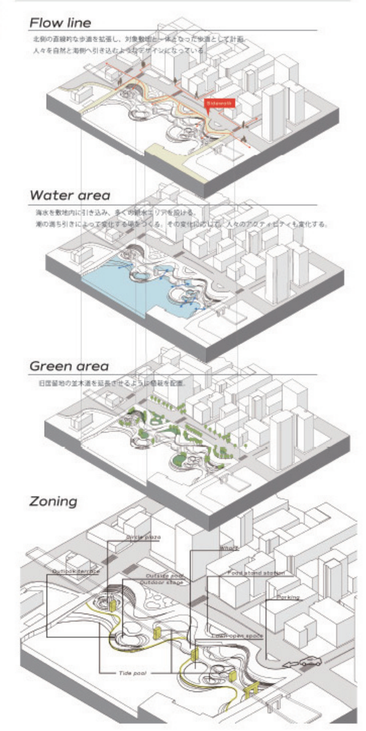
神戸は、かつてから港町として栄え、賑わいの拠点は海辺にあった。しかし、今では、海際は捨てられたような場所になってしまっている。都心部に窮屈な空間が増えていく中で、再び人々を海へと導く。海辺ならではの景観を取り戻し、失われた賑わいを蘇らせる。











MATCHING DESIGN

大西琴子 (遠藤研究室)

ネットで「マッチングビジネス」が注目されている。転職サイトや出会い系サイト、メルカリもその1つ。ネットでなく現実の世界で再現されたのが、シェアオフィスや婚活イベントなど。ネットが普及し便利になったとはいえ、実際に触れ合うということがこれからも求められる。

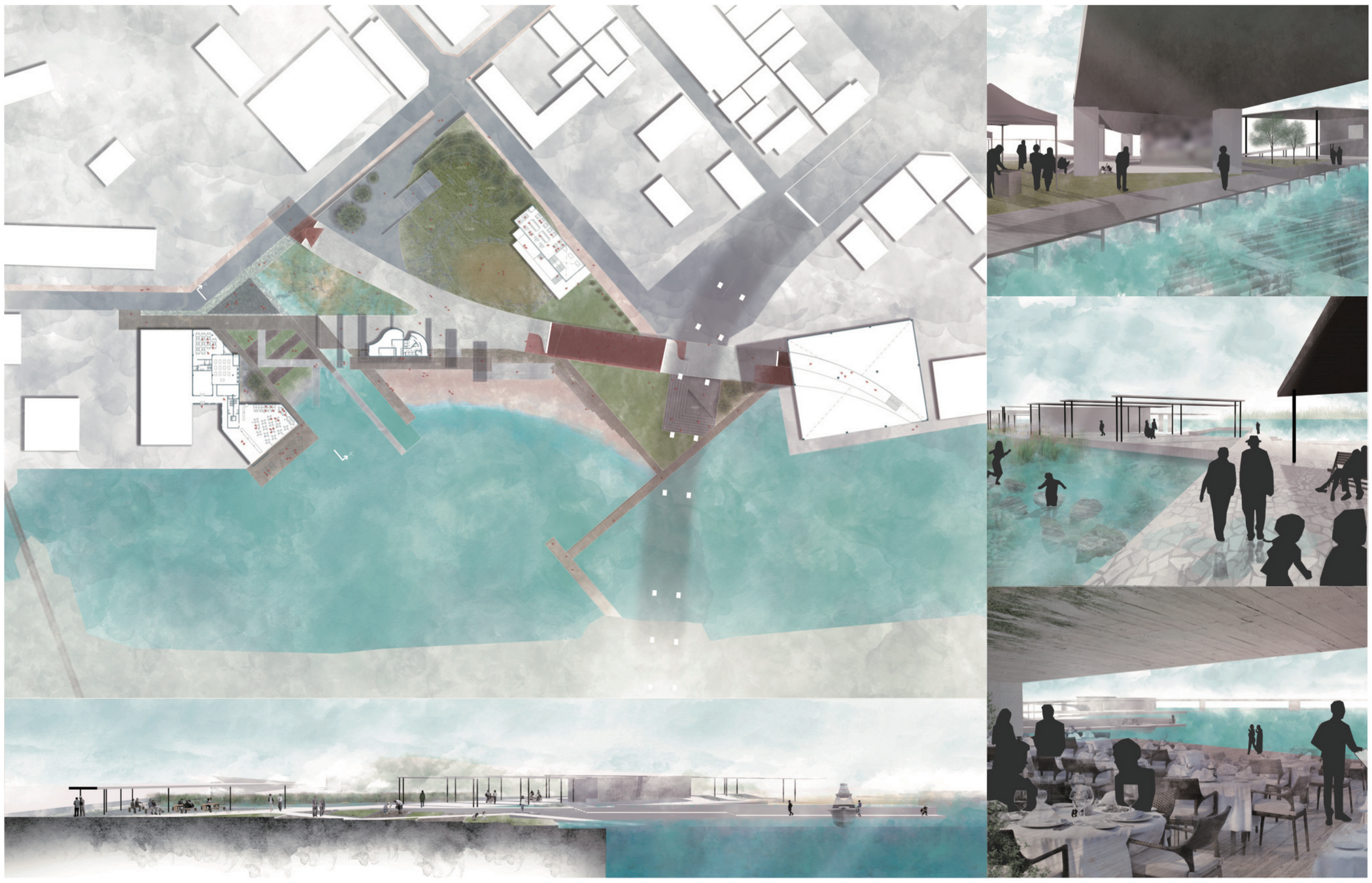




無くした線から見つける居場所

木村友哉 (末包研究室)

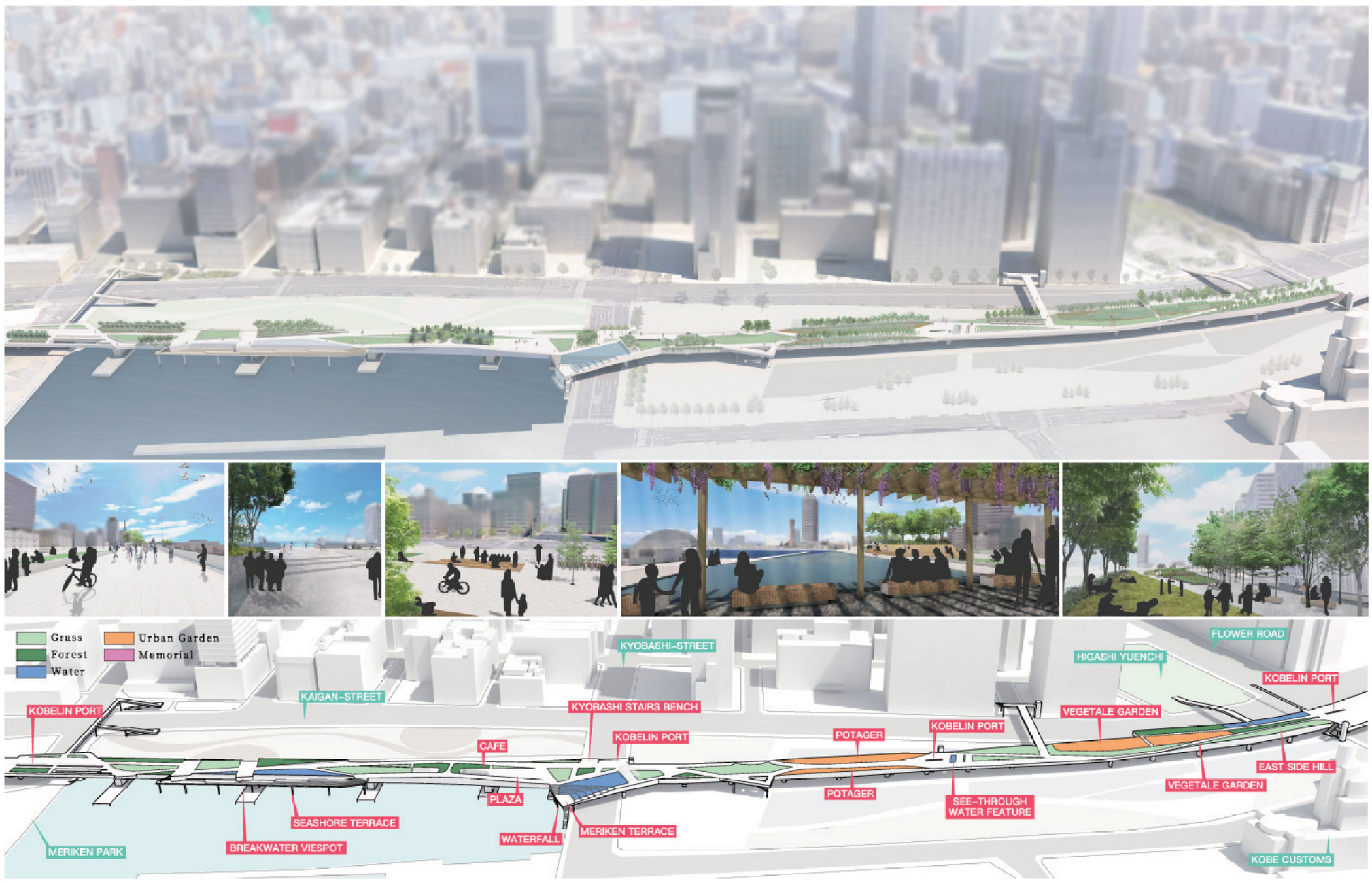
かつて神戸臨港線の線路が横断する工場があった敷地に、海産物の生産と結びついた公園を提案する。線路や工場が産み残した微地形が、今を生きる人々の居場所となり、土地の記憶を静かに継承していく。



路の景色

中倉俊 (遠藤研究室)

東遊園地からメリケンパークまでの阪神高速道路を敷地とし、神戸の街と海、歩行者動線としての東西、多種多様な人々を繋ぐ高架上のオープンスペースを計画する。地上 8m の世界から望める神戸の様々な景色が、かつては高架だった新たな路から広がる。



溜まり、流れる。

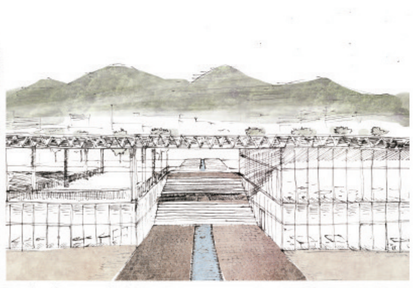
横田慎一朗 (末包研究室)

港湾機能とともにかつての活気を失った兵庫運河を、「流れ」と「溜まり」のデザインによって再び人々の憩いの場として蘇らせる。堤防をプロ ムナードと一体化し、 そこにアクティビティの場を織り交ぜることで、 人々は日 常的に運河を感じることができる。

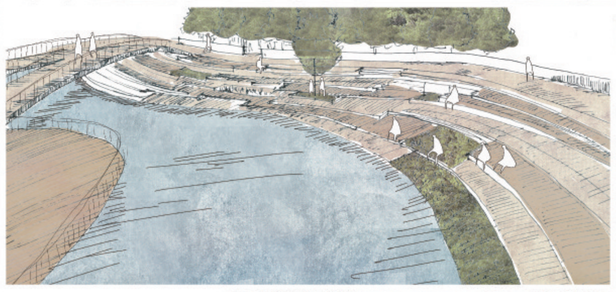


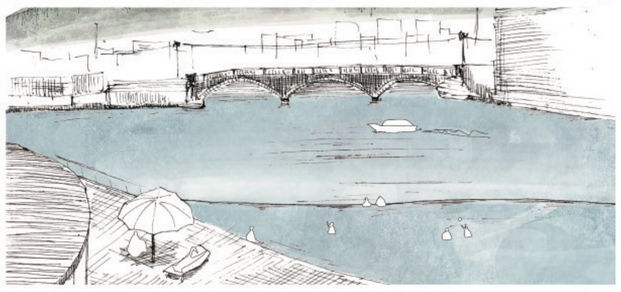














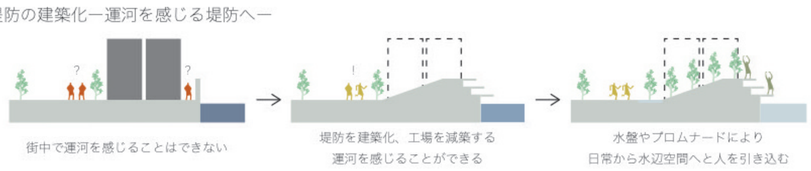


貯木場の証ー「流れ」と「溜まり」を再びデザインするー



歴史：流れと溜まり　周辺環境　人々の動線　日常から水辺へ

堤防の建築化ー運河を感じる堤防へー



街中で運河を感じることはできない

堤防を建築化、工場を減築する
運河を感じることができる

水盤やプロムナードにより
日常から水辺空間へと人を引き込む

urban forest

山田千彬 (槻橋研究室)

商業・行政・観光・オフィス街の中心に位置し、 それらを繋ぐ都市空間のランドスケープ。 建築の高層化によって延床面積を拡大しつつ、 広いピロティ空間は神戸三宮の新たなメインストリートとなる。 樹木と柱による「都市の森」は人々で賑わう。

